戦後仏語圏における「最大多数のための住まい」から「進化型住宅」への展開

ATBAT（建造者アトリエ）の国際・地域交流活動の歴史的経緯に関する研究 その2

A SHIFT FROM "HABITAT POUR LE PLUS GRAND NOMBRE" TO "HABITAT ÉVOLUMIFI" IN POST-WAR FRANCOPHONIE

A study on the history of international and regional exchange activity of ATBAT(Atelier des Bâtisseurs), Part 2

松 原 康 介
Kosuke MATSUBARA

As a continuation of my previous paper “Part 1”, the scope of this paper encompasses the period of ATBAT's work in Morocco, via the manifestation at CIAM 9, up to the point of their separation. In this paper I also conduct some planning studies, for the purpose of examining how the “Housing for the Greatest Number” movement led to the “Évolutif (evolutionary)” concept, and, finally, to the planning method known as “Habitat Évolutif (Evolutionary Housing).” Important consideration is given to the ways in which this last method was concretized through the exchange of members’ ideas, particularly Banshoya’s.

Keywords: Morocco, Algeria, C.S.T.R, M.R.U., Charge de l’Habitat, Gyoji Banshoya

モロッコ, アルジェリア, 建設科学技術センター, フランス復興・都市計画省, 住宅憲章, 番匠谷昭二

1. 研究の背景と目的、方法

1.1 研究の背景

前章「その1」21に続き、ATBAT (Atelier des Bâtisseurs；建造者アトリエ)を国際交流組織と位置付け、その歴史的経緯を考察する。一般的に、ル・コルビュジエの提唱したモダニズムは、多くの後継者に引き継がれたものの個別の計画の劣化は避けられず、バリーを含む世界中の郊外において無機質な住宅を大量に生産したと批判されている。仮にそれが妥当としても、戦後の国際社会変動が自らの仕事環境を深刻に変化させていく中で、多様な出自の後継者が何を考えどう対応したかについては、ル・コルビュジエの影に隠られながらであって、必ずしも十分な既往研究が存在することは難しい。

1.2 研究の目的

そこで本稿では、前稿の構成を引き継ぎ、ウラディミール・ポディアンスキー、ヨルジュ・ギャランディエ、ジェラール・アーン、番匠谷昭二の主要メンバー4人を含む、組織初編後のATBATにおいて国際交流活動の歴史的経緯を目的とする。モロッコでの実践を踏まえて、CIAM第9回大会でマニフェストを発し、それぞれの逆に向かって離散していくまでを考察の対象期間とする。

1.3 研究の方法

前稿の方法と資料を引き継ぎ、各種文献に基づく歴史的方法を用いる。また、本稿では若干の計画的分析に踏み込み、モロッコに起源を持つ「最大多数のための住まい」運動が、 「進化型」の概念を生み出し、更なる交流を通じ計画論として具体化された過程を検討する。フランス近代建築に関する既往研究は数多く、また CIAM について様々なアプローチが可能であるが、ATBAT の対象メンバーに着目し、その交流内容を考察する点に本稿の独自性がある。本稿では、ル・コルビュジエとの繋がりを経たアーニングが自立していく過程（2章）を確認した上で、新生ATBATがギャランディエを中心にモロッコの郊外で重ねられた実践（3章）と番匠谷の加入時までの経緯（4章）を明らかにし、更に共同研究の成果である論文「最大多数のための住まい」を対象とする計画的分析（5章）と主要メンバーが離散するまでの経過（6章）から、新生ATBATの変容とメンバーにとってのATBAT経験の位置づけを明らかにする。

2. アーニングの自立

2.1 ロッスとの協働によるマインツ復興計画業務

ル・コルビュジエの下で担当していたサン＝ディエ＝デ＝ヴォージュとロシェルュ・ラ・パリスの都市計画を相次いで担当する一方、マルセイユのユニテ・ダビタシオニオンにも参加しないままであったアーニングは、1946年秋より、やはり M.R.U. の枠組みで仕事をしていたロッスを中心にとするドイツ、ラインラント地方のマインツの都市計画に、フランス軍令に身を置いて参加している。マインツは、中世以来の旧市街を残し市街地の一部にジェンティコ爆破で破壊されており、フランスの占領下で戦災復興都市計画が模索されていた。
ロッサの自伝では、「何と仕事をすることを強く望んだジェラル・アニングがついてきた（Tenir à travailler avec moi, Gérard Hanning m’accompagnait）」とされており、アニングが自らの意思でロッサの下に来たということになっている。ロッサはCIAM解散の際に傍観者となるなど、コルビジェの終生の友人であったというから[16]、実際にはル・コルビジェを通じてアニングの状況を理解した上で受け入れたものであろう。

アニングの生涯経歴書には、業務内容は複雑な計画の「調整」であったとされている。一方、ロッサの自伝には以下のようないくつかの関係がある。アニングは旧東京市の街舎を小型飛行機で上空から観察するために、全体計画の観点から多くの情報を収集し、所員たちに細かい説明をしなければ気が済まなかった。しかしある時アニングが口を挟み、いや、ボス。あなたが私たちに説明を終えた今で

アニングは既に出来た体の感です。はや、今あなたが説明され

ことの面に描くほどです」と述べた。これを聞いたロッサは、「シンプルな解決を重要であり、アニングの言う通り、それを面

上に現れればよいだけだた良い」と述べている[16]。アメリカ旅行中の元気のなかったアニングが、ル・コルビジェの交換の重圧を脱し、新しい仕事でのその構想を現実にする意欲を取り戻しながら、単なるドラフトマンから、いわば実施のための調整役

にと脱皮しきりがなかったことが知られる。

業務内容を伝えるのは、アニングとロッサの共著である報告書で

ある。そこで掲載されているアニングの原稿の段階、建築設計段階で

も精密な都市計画図でなく、地域との連携や観光、交通、歩行者

などの視点から地元都市空間の問題点と解決の方向性を対照的に示すスケッチであり、それ

までのアニングの作風同様、タレンを用いた説明で視

楽しみやすいものである（Fig.1）。

ウィンドタービン

はここにCIAMの考え

方を表現されていると指摘

している[16]。

2.2 フランス領アフリカにおける業務の拡大

計画案はマインツ市に承認されたもので、軍の統制で都市計画

に理解がなく受け入れられ、アニングの仕事もまた実現するこ

となく終わった。しかし、こうしたアニングをロッサは心に入れ、フ

ランス領西アフリカ（当時）のギニア、コートジボワールの仕事に

興味。アニングの業務経歴書には、ギニアでは病院や学校の計画に

、コートジボワールでは住宅の研究に携わったとされている。

その後もアフリカでの業務を拡大、49年からは再びM.R.U.の専

門家として故郷マダガスカルに隣接するレユニオン（現在までフラン

ス海外県）にて活動。レユニオンでは40年代末から急激に行政

機関とインフラの整備が進んできており、建築家ジャン・ボッシュ（Jean Bosau 1912-1983）が学長などを含む公共の施設計画に取り組んでい

[16]。ボッシュは戦前の1938年にル・コルビジェの要請に基づい

てアルジェリアのムザの谷にあるガルジヤを訪問し、ミネッ

トを中心とする葛飾のスケッチを担当した建築家であった[16]。そう

した中、アニングは、M.R.U.派遣のレユニオン計画の首席の都市計

画家・技術コンサルタントという肩書きを得て、サン＝ドニの都市

計画調査に従事した。港湾部のゾーニング計画図を中心とする報告

書が残されている。また、ボッシュのモナグラフにおいてレユニオ

ンにおける複数作品の協力者、都市計画家(Urbaniste)としてたた

び名前が登場する[16]。ボッシュの作品は行政関連の施設建築で、都市

計画家としてのアニングの役割は敷地やインフラ計画など、建

築作品周辺のコーディネートであったと考えられる。

これは、アニングは1950年にATBATに再接流（後述）するま

で都市計画家として研鑽を積んだ。この場合の都市計画家の業務内

容は、文字通り都市基本計画や地区計画の策定でもあったが、主導

的な建築家がプロジェクトの背後を描き、これを諸条件に適合さ

せる「調整」役という性格がより強かったものと考えられる。

3. 最大多数のための住まい」による新生ATBATの展開

3.1 ATBAT アフリカフランス体制の発足

1949年8月にセールズ通りからサン＝ギュスタス通りへの事

務所移転と指導者交代により生まれた新生ATBAT（前報）は、し

ばらくはボディアスキー・レシルヴェルだけで経営していたが、1953

年には異なる人材を招き入れて、当時の南インド植民地、とり

わけモロッコとアルジェリアにおける業務をターゲットとする社

ATBAT アフリカ（ATBAT-Afrique）を立ち上げた。事務所は当初

モロッコの首都カサブランカに置かれ、後に商業都市カサブラン

カに移転された。一方、パリのATBAT本社は以後、ATBATフラン

ス（ATBAT-France）と呼称することになった。こうしてATBATは

フランスとアフリカの二本立て体制へと再編されたのである。

ボディアスキーは、ここにマルセイユのユニーク・ダシオン

以後の活動の場を求めていたATBATの若手を糾合した。まず目

を付けたのはギャンディアスキーであった。ギャンディアスキーの自伝[16]に

によれば、ユニーク・ダシオンの作業が進近した頃、この建築の

終わりは自分にとって一つの変化、新しい方向性をもたらすであろうと感じていた。私はペースを再き、大きな意図をしなければならなかった[16]と、次回方向性を模索しようとしていた。また、ル・コルビジェ事務所は専門家が厳しく、マルセイユで西部者

からの設計依頼をたまたま引き受けたところ、ル・コルビジェか

らギャンディアスキー。忘れない。君は私のためだけに働くためにこ

にいる」と呪詛されていった[16]。マルセイユの現場を通じて経験

人と人をよりよく知っていたポディアスキーからの提案は、モロ

ッコの仕事を主導するATBAT アフリカの支部長であった。

ギャンディアスキーもまた、マルセイユの現場の技術を経験していたポ

ディアスキーからの誘いは名著化のことであった。「自分はもうル・コルビジェの「ネグレ（négre）」（ここでは従来語使用者の

意）ではなく、ATBAT-Afriqueの支部（filial）長なのだ[16]と一念発

起したのがある。51年5月にはル・コルビジェより自分の元に留

まるように勧められている（LEC-EI-12-15）、これを受けたことはな

かった。こうしてギャンディアスキーはル・コルビジェの事務所を辞

めて、正式にATBATに移籍した。ウズもこれに偽った。

3.2 ボディアスキーの国際ロビー活動

一方、当のボディアスキーは、フランス国内とモロッコ等のアフ

リカ諸国を頻繁に移動しながら、論理的研究に従事していたとさ

れている[16]。また、ル・コルビジェやオジアスキーとの間に

頻繁に書簡のやりとりがなされており、分離後もル・コルビジェ
the 3.3 項目における「大象のための住居」の建築

1951年にATBATアジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）の発足を機に、ATBATはAPBAの活動の後に引き続き、アジア太平洋地域の建築・都市計画の発展を目的として活動している。1953年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リングループ・アジア太平洋建築家・建築設計者機構（APBA）」として発足した。1954年にATBATは「リンク
3.5 CIAM 9ème congrès et ‘le plus grand des aménagements’

1953, Yves Pouillon, le premier congrès de CIAM à Bruxelles, a réuni les plus grands du monde. Cette réunion a été l’occasion de nombreux débats et de nombreuses conférences. Parmi les sujets abordés, il y avait la question de l’aménagement des villes et des communautés. Les participants ont insisté sur l’importance de considérer les besoins des populations et de respecter leur culture et leur identité. Ils ont également discuté de la nécessité de créer des espaces publics qui soient accessibles à tous et qui encouragent l’interaction sociale. Les participants ont également souligné l’importance de la qualité de vie dans les espaces publics et de la recherche de solutions durables pour les villes futuristes.

Le congrès CIAM 9ème a été suivi d’un certain nombre de rencontres et de discussions, ainsi que d’une exposition d’oeuvres d’art contemporain. La session finale a été consacrée à l’analyse des contributions des participants et à la conclusion de l’événement. Les participants étaient unanimes dans leur conviction que le congrès CIAM 9ème avait été un grand succès et qu’il avait marqué un tournant important dans le développement des aménagements des villes et des communautés.
基本的には後者を意味すると考えられる。その上で、都市計画は大枠を定めて一方、個別の「住まい」には、躯体と完成体の時間差を埋めるものとして、「造出型」の対応策をあらかじめ織り込んでおくことが重要であると考えられているのである。

様々な展示と講演で知られる CIAM 第 9 回大会では、その基調講演において、「最大多数のための住まい」の住宅論・計画論が ATBAT メンバーらによって発表され、個人のライフスタイルに応じた躯体から完成体への進化が、その骨子であると述べられていたのである。

A.A.誌で大会の報告特集を担当したのはキャンディスリーであり、そこで日本のバンクス社が紹介されることになる。

3.6 ATBAT フランスへの再結集と「最大多数のための住まい」

一方、CIAM の大会に先んじる 1950 年に、レユニオンでの業務を終えたアンジンが ATBAT に再会していた。業務経歴書によれば、53 年までバリの「ボディアンフィティック」の ATBAT として所属し、「最大多数のための住まい」に関する研究に従事しそのある。同時に、M.R.U.の仕事も継続して実施しており、国土計画局に属して南仏ラングドック地方のルションを中心とする地域開発プロジェクトの事前調査を実施したとされている。しかし、管見の限り、モロッコなど ATBAT アルフィカの中心的な仕事にアンジンは直接関係しておらず、その成績発表の場であった CIAM 第 9 回大会にも参加した形跡はみられない。

では、アンジンが研究した「最大多数のための住まい」は具体的にはどこを対象としたものだったのだろうか。一つは、フランス国内の M.R.U.の仕事において、その観点から住宅問題を扱ったもの。もう一つ、レユニオンの住宅地区計画を「最大多数のための住宅（Logement pour le plus grand nombre）」の一つとしてあげているのである。計画図に見られる空間構成の概要は、車道から分断した不規則な地区内街路が、更に分断していくものの、いずれも袋小路となっており、住宅は各袋小路の周囲に連なっている、というのである（Fig.3）。それぞれの住居は相互に連絡され、地区内街路側に対しては中庭を複数構成し、地区の外側に対しては概ね陥没的である。車道と住宅は緑地で遮られ、入口付近には施設が集中している。歩行分離に基づく住環境の維持が目されている、つまり CIAM に関じた内容と言える。

ATBAT に再会したアンジンが、国際的業務とレユニオンをもととし自らの既往業務を総括し、これを「最大多数のための住まい」と呼んだという経緯が考えられるであろう。このようにアンジンは、復帰した新生 ATBAT において、調整役としての都市計画や地区計画を「最大多数のための住まい」位置付け独自に研究を進めている。結果としてアンジンは、1954 年に出会った建築家フェルナン・プイヨンに、「自分かつて出会ったなかで、もっとも感性に優れた景観計画の取りまとめ役」と貢献されていると考えていた。

一方、モロッコ独立運動に伴う政治状況が高まる中、CIAM 大会の成功を図る。ボディアンフィティックは ATBAT アルファクルスを交渉の中心にし、1954 年から 56 年にかけて集合住宅を実現している。しかし、モロッコでの工作に比較すると必ずしも広く報じられたとは言い難い。一方には、キャンディスリーがメディアに強いメンバーがフランスに呼び戻されたためである。キャンディスリーはこの時、フランスなどのヨーロッパは既に復興の初動期を迎え、大量築造の時代に入っていることを感知していた。そして深刻な住宅不足に陥っているフランスにおいてこそ、モロッコで培った「最大多数のための住まい」が必要であり、ATBAT フランスをその道へと助成しようと考えていた。こうして ATBAT フランスには、ボディアンフィティックの下に、キャンディスリーとその同志、そしてアンジンが再結集することとなったのである。

4. 異邦谷倉二（1930-1998）の参画

4.1 渡仏から ATBAT 参画への経緯

東京工業大学で清家清に学ぶ傍ら、東京日比大学でフランス語とフランス建築事情を学んでいた異邦谷倉二は、1953 年春の卒業設計作品に「正方形の家」を目的とし実験として実現させ、同年 10 月にフランス政府給費留学生として渡仏。「正方形の家」は、戦後の住宅不足の中で、小さな家にいかに長く住み続けるかをテーマとし、清家清の作風を受け継ぎながらも独自の「新帰家構造」を採用し、『新建築』誌や『L'Architecture d'Aujourd'hui』（現代建築）誌（以下、「A.A.誌」と略記）でレビューアされた作品であった。給費留学生としての選抜の際、パリに送ったポートフォリオをル・コルビュジエが評価したことが合格につながっている。当時の多くの建築の留学生と同様、学位取得ではなく研修が目的の留学であった。

異邦谷倉の業務経歴書には、53 年 10 月から 54 年 7 月まで、パリのサン＝オギュストン通り 10 番地にある ATBAT で研修（stage）を務めたとある。これは新生 ATBAT の住所である。師事したのはボディアンフィティック、アンジン、キャンディスリーの三名とされ、研究テーマは「パリ地域圈およびマダガスカルにおける habitat pour (le plus grand nombre)（最大多数のための住まい）」とされている。

この裏付けをひとつずつフランス側の資料に求めることができる、トゥールノン＝ブリュールによる ATBAT のメンバーリストへの掲載がある。リストにはアルファベット順に、初期から 63 年現在までに在籍した建築家、エンジニア、都市計画家、創設者および主要な協力者（principal collaborators）総勢 67 名が掲載されており、人それぞれ、また時期により関わり方は異ったであろうが、学生を含む多くの若手外国人建築家が在籍していたと書かれている。

リストに含まれる Gyoji Banchoya について、Banchoya であるのは Ban “sho”ya の指称が元であるよう、これが番号谷を指していると思われる。業務経歴書上の在籍期間は 1 年に満たないが、その後もアルジェリアやカンボジアなどで ATBAT 関係者
との協働がなされており、協力者としての位置づけは他のメンバー同様、その後も続いたものと考えられる。

4.2 最初の師キャニディス

また、当時のパリの ATBAT 所内で撮影された写真が存在する（Fig.4）。二人の女性所属を挟んで、右側に後年「チーム・キャニディス」の一員となるジョージ・トリエ、左側にキャニディスがおり、その横に番匠谷が映っている。背後となる場所には、前述の「蜜蜂の巣」のパネルが掲示されている。すなわちこの写真からは ATBAT の中でもキャニディスとの近しさが伺われる。

番匠谷自身の後年の回想によれば、「新建築の掲載記事が A.A.誌の目に留まり、53 年 9 月に渡航して編集長のアンドレ・ブロックに作品集を持参したところ、10 月号に掲載された。その後ブロックからはキャニディスを紹介され、ATBAT に入ることとしている。また、「ル・コルビュジエの事務所では最初の 1 年間は無視されたが、キャニディスは 25,000 ブランが支給され、新しいことも学べそうであった」とも述べられている。

ここでル・コルビュジエに直接師事した代表的な日本の建築家の年齢を改めて確認しておくと、前川國男が 1928-30 年、坂倉順三が 1931-36 年、吉阪隆正が 1950-52 年の間に、それぞれル・コルビュジエの事務所で研鑽を積んでいる。佐木義明によれば、その後のル・コルビュジエ事務所の入退職は、国際を問わず 54 年に 1 名のみ、そして 55 年 - 58 年まではずっとゼロであったという。番匠谷の後、55 年に渡仏した進藤-trailed, ル・コルビュジエからキャニディスの事務所に行くよう勧められたという 

Fig.4 Banishoya in ATBAT office

5. 「最多多数のための住まい」における「進化型」の概念

5.1 論文「最多多数のための住まい」

こうして拡充された ATBAT の、最初にして最後の共同成果とみなさせるのが、1954 年 11 月に「技術と建築 (Techniques et Architecture)」誌で発表されたタイトルそのままで文章で「最多多数のための住まい (Habitat pour le grand nombre)」である。具体的な対象地は明示されていないが、北アメリカではなくフランスの住宅問題としている。ただし後述の通り、出版の時点でキャニディス、アンデル、番匠谷のいずれも ATBAT を離脱している。

共同研究は、ATBAT が CSTB の研究助成プログラムに採択され実施されたものである。論文の主著者としてはボディアンスキーとキャニディスの名がクレジットされているが、更に共同研究者である ATBAT のメンバー（Membre de l'Equipe ATBAT ayant participé à l'étude）として、番匠谷と、チーム・キャニディスの主要メンバーであるウッドとジョーク（後述）、後のオベラシオン・ミリオン関係事業でボビニの集会住宅でも協働するアンリ・ピオ、フランス政府給付研修員で、アンデル、番匠谷とともにアルジェに渡ることになるル・リマ出身のホアン・ガンサールス（Juan Gunther ; 1927-2012）を含む12名がリストアップされている（Fig.6）。各参加者の役割は明示されていない。
L'étude des problèmes d'habitat pour le plus grand

Le séjournier est peut-être le module le plus déterminant dans les interactions humaines. Il est lié à l'esprit de recherche et à la recherche du plus grand nombre.

Les facteurs déterminants sont multiples. Les facteurs dépendant du milieu :



Le texte se termine avec une discussion sur l'importance de la recherche et de l'esprit de recherche dans le contexte de l'habitation pour le plus grand nombre.


d) groupe sanitaire et cuisine,

b) chambre des parents

1. Les logements sont composés de:

a) séjour ;

b) chambre des parents ;

c) chambre (s) des enfants ;

d) cuisine sanitaire et cuisine.

2. Les logements sont transversaux, à double axe de vie, en construction ou mise en service, ou sous une forme de planche perpendiculaire à la façade d'une résidence comprise de 3 et de 2.25 m.

3. Les logements sont composés des portes de chaque espace de la façade.

Les portes des façades des logements offre un espace de vie ouvert.

4. Une chambre d'enfants, au moins, est isolée.

5. L'occupant peut devenir, dans une certaine limite, architecte chez lui.

6. L'intérieur du logement est fonctionnel.

La table intérieure est un ensemble avec le séjour qui devient la structure de la famille.

Les surfaces correspondant aux règlements de construction pour les logements

8. Les surfaces des pièces, en fonction des logements et des facteurs économiques et familiaux.

La table est un ensemble qui détermine la structure de la famille.

Les logements sont composés de:

1. Les logements sont composés de:

a) séjour ;

b) chambre des parents ;

2. Les logements sont transversaux, à double axe de vie, en construction ou mise en service, ou sous une forme de planche perpendiculaire à la façade d'une résidence comprise de 3 et de 2.25 m.

3. Les logements sont composés des portes de chaque espace de la façade.

4. Une chambre d'enfants, au moins, est isolée.

5. L'occupant peut devenir, dans une certaine limite, architecte chez lui.

6. L'intérieur du logement est fonctionnel.

La table intérieure est un ensemble avec le séjour qui devient la structure de la famille.

Les surfaces correspondant aux règlements de construction pour les logements

8. Les surfaces des pièces, en fonction des logements et des facteurs économiques et familiaux.

La table est un ensemble qui détermine la structure de la famille.
子供用の寮室が2部屋設けられている。すなわち、Fig.7は外壁であり、Fig.8は近寄による利用例である。

この、体格と利用例のセットは、キチンタイプが「正面
形の家」を紹介した際に、また更に広がれば「新建築」における「正
形の家」においてもみられた、進化型の特徴的表現といえ
る。また、可動室が収納を兼ねるというアイデアも「正面形の
家」に見られる。キチンタイプの指導下にあったという関係性を
考えても、「クローバー・シリーズ」の少なくとも冒頭箇所に、「正
形の家」の基本をとる新築ホームのアイデアの献身であったことが
ほぼ確実に認められるのである。ただし、「正面形の家」には新
にあった清家清の影響が認められるという点では、清家が築造に
も及んだしながら生み出した、戦後日本の新変形廉価住宅論、派流
の一つに位置づけておるべきであろう。

5.3 論文全体における位置づけ
主論文全体におけるキチンタイプの「家の」部分の位置づけはどうだ
ろうか。主論文では、この部分をほぼ3等分して、小論で恒常寝
室(a+b)、小屋台部(c)、水周り(d)とに分け、これが住宅を構成する
基本ユニットであるとする。ここからは「正面形の家」には見られ
なかったアイデアである。実験屋も掲載されていないシンプルな片
流れ屋根であり、日照を考慮した開口部なども相違が見られる。

以降は、3のユニットを複数のパターンにより組み合わせ、住民
の需要を合わせて集合住宅のバリアリウムを除去していかう
うプロセスが図版とともに説明されている。計画計名は「La série
Trêffe」とあり「クローバー・シリーズ」と訳せ、ユーティが組み合
われて行くプロセスを、三つ葉・四葉の組み合わせからなるク
ローバーの葉に見立てたものであろう。壁は多くの反面、収納を
兼ねた間仕切りも用いられている。このように、3分割され開口部
や構造にも変容が見られるもの、「正面形の家」に由来する重要な
アイデアのいくつかは、依然として見られる。結果として提示さ
れている集合住宅は、「進化型の特徴を有する、「最大多数のため
の住まい」以来の到達点を示していると言えよう。

5.4 小括
論文「最大多数のための住まい」は、ATBATメンバーの多くの
交流活動を通じて生み出され、フランスの戦災復興における住宅供
給のモデルを提供しようとしていた。そこには、ル・コルビュジェ
を初めとする近代建築計画論と技術を一つの出発点としてながら、
国連とM.R.U.、あるいはCIAMの活動枠組みにおける諸外国、と
りわけモロッコ等の仏語圏アフリカ諸国、そしてたる古い日本の
都市における、地域からの実践的な学びの成果が反映されていた。

6. ATBATメンバーの離散と「進化型住宅」

6.1 アニングのアルジェ赴任
1953年12月、アニングは、植民地アルジェリアの首都アルジェ
の新市長ジャック・シュブリスの下でアルジェ市の都市計画局を創
設していたM.R.U.のビーレル・グロスに招聘され、同局の局長と
なった。アニングとしてアルジェは、戦前に、ル・コルビュジェ
がカナダやオースタンに普及を奨励し、アルジェではオビン計
画を構想していた魅力的な土地であった。翌年にはル・コルビュジェ
に宛てて業務報告の手紙を書いている(FLC-F2-10-57)。一方で、
ATBATフランスにおいてはモロッコから戻ってきたキャンディリ
スらに押され気味であった。そこで提示されたM.R.U.との関属も
深いアルジェ市の都市計画の実質的責任者のポストは、アニングに
とって顧ってもない転身だったと考えられる。

6.2 チーム「キチンタイプ・ショッキウ・ウッズ」の旗揚げ
同じ頃、フランスの住宅難が深刻化する中、M.R.U.が「オベラン
オン・ミリオン」事業を開始していた。これが2つの以上の寝室を持
つ規模のアパルトマンを、百万万フラン（当時の建築費の相場の半額
程度）とされた以下で供給することを提案するプロジェクトで、ベ
ルナール・セリフスやアクス等、一定以上の建築実績をあげた建
築家が表明されていった(29)。そうした中、1954年1月、早朝にホー
ームレスの凍死者が出たことをきっかけに開始されたピエール神父
( Abbé Pierre)の救急キャンペーン「持たざる者のための家」(29)を
目の当たりにしたキチンタイプは、自らが取り組んできたモロッ
コのビーレル問題に、形を変えてパリ郊外でも取り組むのだとい
っていた。当初、神父は仮設緊急住宅(cité d'urgence)の供給を
優先していたが、キチンタイプは神父とも会面し、廉価集合住宅
を建設する方が効率的であることを説き聴えていた。こうして、「最大多数のため
の住まい」をフランスで実行すべき、自らも「オベランオン・ミ
リオン」に建築家として参加する決意を固める(29)。

ところが、ボディアンスキがこれに反対した。「ATBATの使命
は建築家ではなく、建築家であるクライアントへの技術の提供であ
り、建築家と競合するなどってのものか」というのである。建
築家たちが建築家ではない向こういったキチンタイプは、マ
ルセイユ以来の同士であったウッズ、それにセリフス出身のメン
バーでアメリカに移住すべきを勧めたアシェン・ジェッサ
ク(1921-2011)を説っており、ATBATを正式に解体した(29)。

そこで、3名はチーム「キチンタイプ・ショッキウ・ウッズ」を
名乗り、寄付金を基にピエール神父が創設したHLM公社会マウ
ス(Emmaüs)とも連携しながらボビニ等のパリ郊外で集合住宅を
次々と実現していた(29)。当時、パリ郊外では「サルセル圏地」
に代表される無形領で大規模な集合住宅への批判が高まっていたが、
「最大多数のための住まい」に基づく同一種の住宅計画は比較的
評価が良かったとされている(29)。1956年には、ガール区パノラル・
シュブリスのローズ川沿いに建設されたマルセイユ原水力発電所
の就業者たちの新設住宅地をチームとして受注し、パノラル・シュ
ブリスのローズ川沿いの地上以上の面積に計画された新市街労働者
の集合住宅に取り組んだ(29)。こうして、キチンタイプはATBAT
から離脱した直後から、建築家として多産の時期を迎え、ドゥプ
クルヴォワで開催されたCIAM第10回会議ではTEAM10の結成を
主導。彼がトゥールーズ・ミロワのコンペで勝利し、都市計画
史上その名を不動のもととしたのは61年のことである。

6.3 番匠谷のアルジェ赴任
1954年7月、番匠谷は局長補佐としてアニングに招聘されアル
ジェに渡った。論文「最大多数のための住まい」と協働したガッサン
も同じく補佐の席を引き続きアルジェに来ており、ATBATではいわく
若手２人をアニングから選ばれたものと考えられる。番匠谷
は以降、生涯アニングを「先生」と呼び親しみることになるが、当
初のATBATでは実質的に2、3ヶ月しか同僚はなかった。A.A.
誌の掲載や「最大多数のための住まい」研究を通して高評価され
ていた番匠谷は、簡単にATBATを離れたのは何かだろうか。

——1480——
アルジュに移った翌年、番匠谷は雑誌記事でフランス滞在を振り返り、「ル・コルビュジエに代表される建築モード雑誌の影響をイ
ヤというほど見つけられ、嘔吐を催したくなる程であった」と述べ、年を追って「アルジュリーにモロッコで見られる新式の啓蒙・
教育と新しい配色をもって近代建築と待っている連中」に向けてて
いる。名指しされていなかったが、候補アールジューとモロッコに近く、派手な教育啓蒙と配色をもつ、かつ雑誌で特集
されていて、番匠谷が著しくその魅力に拝注したものをといえば、該当す
るのはキャンドリスの「蜂室の巣」の他には考えにくい。
キャンドリスの築意とは裏腹、「日本のかなりの風俗の中には
近代味をたたえた」と評された番匠谷は、もとよりそこに過剰を
見ていたのである。それがATBATを離れた理由の一つであろう。
キャンドリスは自伝において比較的多々の人名をあげており、
日本の進歩民についても一言だけ触れている。しかしこの間、
に交流があったはずの番匠谷については一切触れていな。

6.4 ポディアンスキーのATBAT
主要メンバーが次々とATBATを去る中、晩年のポディアンスキー
は、「諸外国でプロジェクトを指揮したものの、その主に見合う
だけの案件は週に会合を続け経営不振であった」と評価されている。
アンジーと番匠谷とアルジュ、カンポアで協働し、国際的なアド
ポケーション活動も続け、1963年のルーベルの逝去をもって
事務所としてのATBATはほとんど終了させられたとされる。

ポディアンスキーは、建築（デザイン）家と（構造と施工）技術
者の職業の間の分離が次第に明らかになっていく中で、実際の両者の対
等な協働の重要性も明らかとなると考えていた。実際に、CSTBを通
した新技術の承認システムを普及させた功績は大きかったといえる。
しかし、新技術を事務所としてのATBATが専用特許として独占し
えたわけではなく、戦後10年近く経過した後の建設ラッシュでは、
爆発的に増加する「建築家」の仕事の波には乗れなかったのである。

6.5 「進化型住宅」の定着
キャンドリスは、敵敵から5年程経過した1959年に、「進化型
住宅（Habitat Evolutif）を含む標題の論文を2編に発表している。
掲載誌は異なるが、テキスト、図版ともに共通点が多く、この時点
におけるキャンドリスの代表的計画論とみなしうる。
図版の内、特に注目された
のは、Fig.9及びFig.10
である。Fig.9は、夫婦の
ライフサイクルが4段階で
描かれたもの。すなわち、
1)新婚の夫婦2人家族
2)子供一人授かった3人家
族、3)子供が増えての4人家
族、そして4)夫が2人
とも独立した、再度の
夫婦2人家族、という
具合である。家族の変
容に従い間仕切りが增
減されているのがわかる
通り取りは「正方形
の家」を想起させる。

またFig.10では、固定壁の殆どない空間に、日本の屏風をも思わ
せる折りたたみ式の間仕切りが設けられ、入浴、着替え、食事、仕
事、寛ぎといった日常の活動がそれぞれの空間で行われている。
既に述べてきたように、これらの「進化型」のコンセプトを明快
に伝える図版である。そこで、番匠谷を含むATBATメンバーとの
共同研究、すなわち国際交流の形態を表すことに無理はない。オ
ペラジオン・ミリオンからバニョルク・シュール・セズ、そしてトゥー
ルーヴル・ミラエ、キャンドリスが実業を重ねていく過程で、
その理論の核心として定着したのが「進化型住宅」であった。キャ
ンドリスは、竣工後パラノル・シュール・セズ系列のコミュニティ
会館を訪れた際、住民が設計時の意図とは異なる仕方で空間を利
用していたが、まさに自分が望む所だったとも述懐している。

A.A.誌での紹介を通じ、「正方形の家」にわが意を得たキャンドリス
が、以後も研究を続ける過程でその重要性を真剣に意識し続け
ながらも、自分の元を去った番匠谷には、あえて自覚もなく触ら
なかった。そうした経緯があったのではないかと考えられるのである。

7. 結論
ATBATの果たした重要な役割は、「最大多数のための住まい」に
関する技術研究とアドベンチャー、そして広く仏語圏におけるその実
践を通じた検証により、「進化型住宅」を問出した点にある。「進
化型」のコンセプトは、ル・コルビュジエのユーティ（居住単位）
上の形状を見ること出来ない。しかし、地域によって異なる住居形
態への対応を、クラスター住民を含む一般庶民レベルで検証し、一定の
時間的経過を前提として、主として理論的に考えたのはATBATの先駆
的貢献であった。その背景には、異なる出自の若者がそれぞれの経
験を踏まえて、地域で協働しあう、国際交流活動が存在した。

また、主要メンバーにとっても、ATBAT在籍時の交流経験は、
後の活動に繋がる少なくなない意味を持っていた。アンジーには、父
権的存在であったル・コルビュジエに代わったロッソやボッシュの下
で、アフリカの諸都市を対象に、主導的建築家に対する調整役とし
ての都市計画家の職能を開花させていた。キャンドリスは、建築
住民の必要性を世界的にアピールしながら、モロッコでの地域住民
との交流から地域文化に向けたデザインの必要性と留意を身に纏
していた。「正方形の家」との出会いが以後の「進化型住宅」の形成
に少なからぬ役割を果たしている。番匠谷は、清流研究において
実現した「正方形の家」が来仏と同じにフランス最先端の計画論な
文脈に直接位置づけられるという幸運に見舞われたが、流行に盲従
することなく独自に「進化型住宅」の追及を続けることになる。そ
してポディアンスキーは、ATBATの活動の場を準備し、新技術
のアドポケーターとして貢献した。

地域を越える普遍性を目指した近代主義は、むしろ地域的な特徴
を勘案された国際的な交流によって形成されたものである。ATBAT
は、そうした国際交流の舞台の形成であり方を示している。

謝辞
本研究は、科研費新学術領域研究「西アジア地域の都市空間の重
層性に関する計画論的研究」（18H05449）並びに基盤 C「日本の貢
献を踏まえた中東・北アフリカ地域の都市計画史・「イスラム都市」
論を越えて」（18K04530）に基づき実施されました。
注
1) 文献 36 p.407.
2) 文献 36 pp.157-160.
3) 文献 15 pp.87-108.
4) 文献 15 pp.89-.
5) 文献 15 p.89.
6) 以下の文献は、各々のタイトル、著者、所蔵館、内容を詳細に検討
7) 文献 34 p.28, 1949 年から 1949 年までに理論の研究の時期とされ、その成果が住宅建築であるとされる。
8) 日本建築学会は現在も住宅建築研究所がつくる。
9) ディオン (bidon) はフランス語原義で、転じて「見せかけ」の意味をもつ。
10) 引用語は「Institut Technique Français du Bâtiement et des Travaux Publics du Maroc」より。
11) アフィニティ研究所のフランス語名の文言を抜粋した。
12) 文献 11 pp.191-192 の記述の検証を示す。
13) 文献 11 pp.194-195, pp.194-195. 結果として同一大学は、パワーウォックスの車輪建築からなるものとして報告されてきた。
14) 例えば文献 5.
15) 課題課題では ATBAT は建築家、技術者、都市計画家が関わる国際チームであり、サミット・ユーロポリスを通じて 10 速に本部が存続されている。
16) しかし、これを Logement (住宅) の用語は使われていない。
17) 後述のアムステルダム 1955 年 5 月 29 日に開催されている。
18) 文献 32 p.188.
19) 例えば文献 33 pp.109-118. 一方、キューポラは自伝を ATBAT で示した用語「Suzuki」という日本人をコルベリッシュからの紹介で引き受けていたという文書。
20) 文献 7. 仏文版は以下の通りである。
21) アルファルファ（フクラス・モール）のアルファベット表記。
22) 1954 年 4 月から CSTB 所長に就任（1954 年 4 月の M.R. 資料）。
23) 文献 33 pp.98-99.
24) 文献 17 pp.198-199 においてその概要が紹介されている。
25) 文献 31 pp.202-203. キャンプ・ディリは神父に対し、仮設住宅は一つのアリババに過ぎず、むしろ集合住宅を建設すべきだと説いている。エッフェルのポール・クーリックは、同じく移動するなど交流を持った。
26) 文献 26 pp.196-197.
27) カヴァッソ建築の一つを示すために、エッフェル鉄骨ビルを例に挙げれば、補助用の住宅 60 戸を建設している。キャンプ・ディリはこれこそモロッコを思い出したと回想している。文献 21 p.205.
28) 例えば文献 22, サッサル田舎地では「フレンチフレンチ」による建築技術の発展が見られたが、水際都市計画の計画が見出された。水際都市計画の計画を読み過 Attached Image: image.png.
A SHIFT FROM “HABITAT POUR LE PLUS GRAND NOMBRE” TO “HABITAT ÉVOLUTIF” IN POST–WAR FRANCOPHONIE

A study on the history of international and regional exchange activity of ATBAT (Atelier des Bâtisseurs), Part 2

Kosuke MATSUBARA*

*Assoc. Prof., Faculty of Engineering, Information and Systems, Division of Policy and Planning Sciences, University of Tsukuba, Ph.D.

Presupposing the ATBAT (Atelier des Bâtisseurs) as an international exchange organization, this paper considers the historical meaning and position of the exchange activities of the newborn ATBAT from the viewpoints of four key members: Vladimir Bodiansky, George Candilis, Gérald Hanning, and Gyoji Banshoya. The scope of this paper encompasses the period of their work in Morocco, via the manifestation at the Congrès International d’Architecture Moderne 9 (CIAM 9), up to the point of their separation. As a continuation of my previous paper “Part 1”, I employ the same historical methods and resources herein. However, in this paper I also conduct some planning studies, for the purpose of examining how the “Housing for the Greatest Number” movement led to the “Évolutif (evolutionary)” concept, and, finally, to the planning method known as “Habitat Évolutif (Evolutionary Housing).” Important consideration is given to the ways in which this last method was concretized through the exchange of members’ ideas, particularly Banshoya’s.

Following his struggles with Le Corbusier, and based on his experience working with Marcel Lods and Jean Bossu in African countries, Gérald Hanning became an independent urban planner. In this role, Hanning coordinated the environments around these architects’ masterpieces.

In 1951, ATBAT opened a branch in French Morocco, and Candilis became the director of that branch. Cooperating with Michel Ecochard who was the director of urban planning of the French protectorate government, ATBAT initiated the planning movement known as “Habitat Pour le Plus Grand Nombre (Housing for the Greatest Number).” As a well-known example, they realized their masterpiece “Nid d’Abeilles,” intended to provide housing suitable for the lifestyles of Moroccan people from rural areas. They advocated this movement at CIAM 9, held in Aix-en-Provence in 1953. It was here that they suggested the idea for “Évolutif (evolutionary)” housing.

In 1953, Gyoji Banshoya participated in ATBAT. Candilis was so willing to welcome him that he published Banshoya’s first masterpiece, “The Square House” in L’Architecture d’Aujourd’hui. For Candilis, the square house seemed an advanced example of the idea of Habitat Évolutif.

This led me to conduct some analysis of the planning for their co-research project “La Série Trèfle (Clover Series).” This endeavour was supported by C.S.T.B. and published in Techniques et Architecture in 1954. I note that the key idea of separating the skeleton and mobile partition which partly stems from the design of the square house, can be clearly seen to play an important role in the planning concept of “La Série Trèfle.” Just after the project’s completion, Candilis resigned from ATBAT and began his career as an independent architect with the team of Candilis–Josic–Woods. There, he profited from the idea of Habitat Évolutif. Hanning and Banshoya also left ATBAT, and moved to Algiers.

The most important roles played by ATBAT were (1) expanding the idea of a new housing style suggested by Le Corbusier based on their technical research; (2) examining its applicability to the general public, including slum residents in various Francophonie cities; and (3) innovating the planning methods of Habitat Évolutif. It is the case that the beginning of this concept can already be seen in Le Corbusier’s theories. However, it was ATBAT’s original contribution to provide a theoretical framework, based on their field work, for the realization of Habitat Évolutif. In conclusion, I point out that these novel constructions were made possible by the international exchange activities among the young architects and planners of various origins who were members of ATBAT.